

## 第2回木更津市立小中学校適正規模等審議会会議録

○開催日時：平成30年10月5日（金）

午後1時30分から午後3時30分まで

○開催場所：木更津市役所朝日庁舎 会議室E

○出席者氏名

審議会委員：橋口武信、鎌田哲也、内田慎一郎、関口明、住江祐輔、鈴木志乃、北村和則、清水一太郎、石井恵一、加藤淳

教育委員会：高澤教育長、岩埜教育部長、  
（教育総務課）秋元教育部次長兼課長、  
（施設課）重森副主幹  
（学校給食課）真戸原課長

事務局：（学校教育課）河野参事兼課長、重城副課長、篠田主幹  
（学校再編課）内海主幹、古宇田主事、大胡主事

○議題等及び公開非公開の別

議事 (1)各学校の現状と課題：公開  
(2)本市における適正規模：公開

○議事等概要

事務局より豊田委員の辞職について報告

### 1. 開会

事務局より、会議の成立の報告及び配付資料等の確認

### 2. 会長あいさつ

本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。7月18日に第1回目の会議を開催し、非常に多くの資料が配付されており、事務局の方から一度目を通してくださいと宿題が出されました。この資料から、現在木更津市にある小学校19校、中学校13校が適正規模であるのか、適正配置になっているのかについて、審議を重ねてまいりますので、忌憚のないご意見を頂ければと思います。

### 3. 教育長あいさつ

この度は、公私共にお忙しい中、第2回木更津市立小中学校適正規模等審議会に出席していただきありがとうございます。会長からお話があったように、7月18日に第1回木更津市立小中学校適正規模等審議会を開催いたしまして、委嘱状交付のあとに、本市の適正規模・適正配置のあり方について諮問させていただきました。そして、本日が2回目の審議会になります。この間に、9月市議会定

例会が終了いたしました。その中で市議会議員の方から適正規模等審議会についてご質問がありました。また、本年度末をもって統合します富岡小学校と馬来田小学校、正式には学校名が富来田小学校と決定していますが、隣の富来田中学校と合わせて本市初となる小中一貫校を開校したいと考えております。その案についても、議員全員協議会に提出いたしました。10月1日からパブリックコメントをかけておりますので、お時間がございましたらご覧頂ければありがたいと考えております。

また、審議会委員でありました豊田委員が議会で同意をされまして、10月1日付けで教育委員に就任されました。教育委員となりますと、教育委員会を総括するという立場になりますので、そういったことも踏まえてくださり、豊田委員から辞職願が提出されましたので、教育委員会として受理させていただきました。

この審議会につきましては、条例で12名以内をもって行うとなっております。今回が2回目の審議にあたりますので、欠員につきましては、大変失礼ながら11名の委員の方がいらっしゃいますので、新しい選任はせずに、11名で審議会は行っていきたいと考えておりますので、ご理解を頂ければありがたいと考えております。よろしくお願いいたします。

さて、本日の議題でございますが、お手元の次第にありますように、各学校の現状と課題、本市における適正規模のあり方についての2つが議題となっております。事務局の方から学校の現状と主な課題について、詳しくは踏み入れないと思いますが、全体について説明いたしますので、小中学校の現状についてご理解頂ければありがたいと考えております。次の3回目からは、学校毎に検証していきますので、現状と課題というように捉えていただければと思います。

それから、本市における適正規模につきましては、本審議会の一つの大きな議題になりますので、本市における適正規模のあり方について、皆様の貴重なご意見を伺って、ある程度の形を整えていければと考えておりますので、よろしくお願いいたします。いずれにいたしましても、本日はお忙しい中お集まりいただきありがとうございます。ぜひ、ご協力頂ければと思いますので、よろしくお願いいたします。

#### 4. 議事

橋口会長 　　では、議事に移ります前に、前回配布されました資料につきまして、目を通していただくよう、事務局から依頼があったと思いますが、前回配布されました資料につきまして、質問等ありますでしょうか。

鎌田委員 　　資料2の平成31年度以降の数値は、どのように算出していますか。

古宇田主事 　　資料2-1については、住民基本台帳に記載されている人口を各年に足して算出している。資料2-2の注意書きにある「金田小学校、金田中学校、請西小学校の社会増加を加味して算出」につきましては、木更津市推計人口の基礎資料として出ている計画期間内で人口の張り付きが完了すると見込んだ上で、平成27年国勢調査の県内市町村からの性別・年代別転入比率をかけて算出しています。

ただ、金田地区については、当初の計画より人口の張り付きが遅れている状況もございますので、このような状況も考慮して現段階での推計値を出しております。また、あくまでも推計値となりますので、このような数値にならないこともありますので、ご承知おきください。

## (1)学校の現状と課題

### (説明概要)

橋口会長      それでは、議事の(1)「各学校の現状と把握について」を議題に供します。事務局より、説明を求めます。

内海主幹      まず、本市における各学校の現状と課題について、説明させていただきます。では、資料4をご覧ください。

各学校それぞれの検討につきましては、次回から行わせていただきますので、今回は木更津市の小中学校の現状を簡単に説明いたします。

4ページの木更津第一小学校をご覧ください。表の見方も含めて、ご説明いたします。

まず児童数です。平成30年度に関しては、5月1日現在の各学校の児童数の実数となっておりますが、平成31年度以降は平成30年5月1日現在の住民基本台帳人口を基に算出しております。なお、宅地開発等で人口増が予想される学校もありますが、社会増は入っておりません。

この表を見ますと、木更津第一小学校の児童数は現在411名ですが、平成36年には児童数が366名となるなど、今後は少しずつ減少に向かっていることが分かります。

学級数ですが、通常学級13学級と特別支援学級3学級で、平成36年度には通常学級12学級と特別支援学級3学級になると予測されております。

その学級数ですが、国の基準では通常は小学1年生のみ35人学級で、小学2年生から6年生、中学1年生から3年生は40名で1学級となっております。しかしながら、千葉県は規定により、小学1年生から3年生、中学1年生は35人、小学4年から6年生、中学2,3年生は38人で学級を編成することができますので、その数字で計算しております。

また「現状と課題」ということで、1から7まで載せております。木更津第一小学校の主な特徴としましては、学区全域が片道2km以内であり、学区全域が中心市街地を形成していることです。

続いて木更津第二小学校です。児童数ですが、現在は455名で通常学級は16学級、特別支援学級は2学級です。32年度にかけて児童数は少し増加しますが、その後は緩やかに減少に向かい、それに伴い平成36年度には児童数が426名、学級数は通常学級が14学級、

特別支援学級は2学級となると予測されています。

主な特徴としましては、学区全域が3km以内であることと、地域によっては、バスを利用する児童もいることです。

5ページをご覧ください。東清小学校です。児童数ですが現在54名、通常学級が6学級で特別支援学級が1学級です。今後、大幅に減少していき、平成36年度には児童数が23名、通常学級が4学級、特別支援学級が1学級となるとの予測が出ています。

主な特徴としては、学区全域が片道4km以内であることです。また今年度につきましては、複式学級が存在する状況ですが、本来は担任を持たない教務主任が学級担任となり、複式学級となるのを防いでいる現状があります。平成31年度には一度複式学級が解消されますが、平成32年度からはまた複式学級ができます。そして平成34年度には、複式学級が2学級できる予測となっております。

また小規模特認校となっており、一定の条件のもとに通学区域外からの入学を認めています。

続いて西清小学校です。児童数ですが、現在児童数は265名、通常学級が10学級、特別支援学級が3学級です。今後は、毎年、少しずつ児童数が増え、平成36年度には児童数が340名、通常学級が12学級、特別支援学級が3学級です。

主な特徴としては、学区全域が片道4km以内であることです。また敷地面積が狭いため、体育館の上にプールを設置していますが、それでも十分な運動場が確保できていない現状があります。

また、中学に進学する際、児童は木更津第一中学校と木更津第三中学校に分かれております。

6ページをご覧ください。南清小学校です。児童数は530名、通常学級が17学級、特別支援学級が3学級です。今後は毎年、児童数が減り、平成36年度には児童数が344名、通常学級が12学級、特別支援学級が3学級と、現在の児童数より大幅な減少が予想されております。

主な特徴としては、一部片道4kmを超える地区があることと、以前はきわめて小規模の学校でしたが、宅地開発、大型商業店舗の進出により、市街地としての状況を見せ、児童数が急増したことです。そのため平成25年に校舎を増築しました。

続いて清見台小学校です。児童数は542名、通常学級が18学級、特別支援学級が3学級です。平成36年度には児童数が519名、通常学級が18学級、特別支援学級が3学級と、今後はほぼ横ばいと予想されています。

主な特徴としては、学区全域が片道2km以内であることです。

7ページをご覧ください。祇園小学校です。児童数は582名、通

常学級が18学級、特別支援学級が4学級です。平成36年度には児童数520名、通常学級16学級、特別支援学級4学級となるなど、今後は少しずつ児童数が減っていくと予想されます。

主な特徴としては、学区全域が2km以内であることと、プールが来年度から使用できる予定であることです。また今現在、祇園小学校の児童の進学する中学校は木更津第三中学校と清川中学校に分かれておりますが、平成31年4月から清見台東3丁目、東清小学校通学区を除く菅生、清川1・2丁目が清川中学校区から木更津第三中学校区になります。そのため祇園小学校の児童は、全て木更津第三中学校に進学することになります。

続いて岩根小学校です。児童数は317名、通常学級が12学級、特別支援学級が3学級です。平成36年度の児童数は331名、通常学級が12学級、特別支援学級が3学級と、今後はほぼ横ばいと予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道3km以内であることと、JR内房線の西側の旧市街地に学校があることです。

8ページをご覧ください。高柳小学校です。児童数は401名、通常学級が13学級、特別支援学級が3学級です。平成36年度は児童数387名、通常学級が13学級、特別支援学級が3学級と、今後はほぼ横ばいと予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道3.5km以内であることと、JR内房線の東側の旧市街地に学校があり、学区には国道16号線バイパス道路と旧道が並行して走り、交通量が多い場所があることです。

続いて波岡小学校です。児童数は230名、通常学級が9学級、特別支援学級が2学級です。平成36年度には児童数が231名、通常学級が9学級、特別支援学級が2学級と、今後はほぼ横ばいと予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道4km以内であることと、国道127号線バイパスと片側一車線の狭い市道に接しているため、通学の安全性の確保が大きな問題であることです。

また、平成18年度には畑沢4丁目、港南台1.2.5丁目が畑沢小学区から波岡小学区となりました。

進学する中学校につきましては、畑沢中学校と波岡中学校に分かれている現状があります。

9ページをご覧ください。鎌足小学校です。児童数は80人、通常学級が6学級、特別支援学級が2学級です。平成36年度には児童数76名、通常学級が6学級、特別支援学級が2学級と、今後はほぼ横ばいと予想されます。

主な特徴としては、一部片道4kmを超える地域があることと、学

区の大半が市街化調整区域であるため、将来的にも児童数の大幅増は見込めない状況であることです。

続いて金田小学校です。児童数は182名、通常学級が7学級、特別支援学級が2学級です。平成36年度には児童数が379名、通常学級が15学級、特別支援学級が2学級と、今後は毎年児童数が増え、大幅な増加が予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道3.5km以内であることと、現在、土地区画整理事業が進んでおり、人口が急増する可能性の高い地域だということです。現在の推計でも平成33年度には教室が足りなくなると予想されております。

10ページをご覧ください。中郷小学校です。児童数は68名、通常学級が6学級、特別支援学級が2学級です。なお通常学級ですが、複式学級になるところを本来、学級担任を持たない教務主任が学級担任となり、複式学級を防いでいるため、6学級となっております。この形は来年度まで続く予定です。平成36年度には児童数が83名となるなど、今後は増加傾向と予想されます。なお通常学級が6学級、特別支援学級が2学級となる予測が出ています。

校舎は平成26年度に仮設校舎が建てられ、来年度より以前、中郷小学校があった井尻地区に移る予定です。

主な特徴としては、学区全域が片道4km以内であることと、学区の大半が市街化調整区域であるため、将来的にも児童数の大幅増は見込めない状況だということ、小規模特認校であることです。

続いて馬来田小学校です、児童数は163名、通常学級が6学級、特別支援学級が2学級です。平成36年度には児童数が143名、通常学級が6学級、特別支援学級が2学級と、今後はやや減少傾向と予想されます。

主な特徴としては、平成30年度末をもって、富岡小学校と統合し、校名が富来田小学校となり、それと同時に富来田中学校と合わせ、小中一貫校となります。

なお、富来田小学校の校舎は馬来田小学校の校舎を使います。

また学区が広く、今現在の馬来田小学校区は一部片道4kmを越える地域があり、山間部の児童には自転車通学を許可していますが、現在自転車で登校している児童はいないということです。

11ページをご覧ください。富岡小学校です。児童数は28名、通常学級が4学級、特別支援学級が2学級です。

先ほど申しましたとおり、平成31年度より馬来田小学校と統合して、富来田小学校となります。また富来田中学校と合わせ、小中一貫校となる予定です。

なお、富岡小学校区から富来田小学校に通学する児童につきまして

は、スクールバスでの送迎を予定しております。

続いて畑沢小学校です。児童数は564名、通常学級が19学級、特別支援学級が3学級です。平成36年度の児童数は510名、通常学級が18学級、特別支援学級が3学級と、今後はやや減少傾向と予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道3.5km以内であることと、学区は市南西部に位置し、君津市と隣接していること、以前、児童数が増えたために、波岡小学校との学区見直しを行ったことがあることです。

12ページをご覧ください。請西小学校です。児童数は488名、通常学級が16学級、特別支援学級が3学級です。平成36年度は児童数が473名、通常学級が15学級、特別支援学級が3学級です。今後の予想は「ほぼ横ばい」と書かせていただきましたが、実際には請西千束台土地区画整理区域が請西小学校の学区になったことにより、児童数の増加が予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道2km以内であることと、社会増により、児童数が急増したため、平成26年に真舟小学校と分離をしたことです。

また進学する中学校は、木更津第二中学校と太田中学校に分かれております。

続いて八幡台小学校です。児童数は895名、通常学級が27学級、特別支援学級が4学級です。平成36年度には児童数651名、通常学級が21学級、特別支援学級が4学級と、今後は毎年児童数が減っていき、現在の児童数より大幅な減少が予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道2.5km以内であることと、羽鳥野地区の人口急増に伴い、児童数が増加していたこと、通学時間帯の交通量が非常に多いことです。

13ページをご覧ください。真舟小学校です。児童数は941名、通常学級が29学級、特別支援学級が3学級です。平成36年度には児童数985名、通常学級が30学級、特別支援学級が3学級です。今後の予想は、ほぼ横ばいです。

主な特徴としては、今、新しい校舎を建築中であることです。本来教室として使用する目的だった教室数は27教室でしたが、多目的室を2教室、視聴覚室を1教室転用しても教室が足りず、図工室を教室に転用したり、特別支援学級は1教室を2学級で使用したりするなど、余裕が全くない状態です。

また別の特徴としましては、学区全域が片道2km以内であること、児童数が現在も増えていること、昨年度の7月に請西千束台土地区画整理区域が真舟小学区から請西小学区となったことなどです。

それから現在、児童は木更津第二中学校に進学しておりますが、通学区域見直しにより、平成31年度からは請西東6丁目～8丁目及び請西南2丁目～4丁目の児童は太田中学校に進学することになります。つまり、平成31年度からは児童の進学先は木更津第二中学校と太田中学校に分かれることとなります。

(質疑応答)

橋口会長 小学校の説明が終わりましたので、ここままで質問はありますか。  
鎌田委員 馬来田小学校と富岡小学校が、統合後に富来田中学校と合わせて小中一貫校になると説明がありましたが、小中一貫校のメリットとしては何が挙げられますか。

内海主幹 児童生徒の思いやりの心が育つ、小中学校教職員の相互理解が深まり一貫した指導ができるといったメリットがあります。

高澤教育長 富来田小学校・中学校につきましては、一体型の小中一貫校ではなく、道路を挟んでいるので、隣接型小中一貫校になります。校長先生もそれぞれにいます。名称の方は、通称で「富来田学園」と呼んでいきたいと思えます。小中学校の9年間で4・3・2に分けており、最初の4年間は学習や生活の決まりを学ぶ期間、次の3年間は中一ギャップの解消や、人間性を高めることを中心にした期間、最後の2年間は高校入試や社会に羽ばたくために自立を目指す期間というように、9年間で区割りしてあります。また、中学校の先生と小学校の先生の交流を持たせ、中学校の先生が小学校に行き、算数や英語等の教科を教えること等によって、全体的に子ども達の学びを伸ばしていきたいと考えております。

素案につきまして、パブリックコメントに出ておりますので、ご覧ください。

(説明概要)

内海主幹 続いて中学校に移ります。14ページをご覧ください。まず、木更津第一中学校です。生徒数は304名、通常学級が10学級、特別支援学級が2学級です。平成36年度には生徒数が283名、通常学級が9学級、特別支援学級が2学級と、今後はやや減少傾向と予想されます。

通学区域は木更津第一小学校区と西清小学校の一部学区となります。

続いて木更津第二中学校です。生徒数は557名、通常学級が15学級、特別支援学級が3学級です。平成36年度には生徒数が548名、通常学級が16学級、特別支援学級が2学級です。今後はほぼ横ばいと書かせていただきましたが、請西千束台土地区画整理区域の街開きにより、更に生徒数が増えることが予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道3.5km以内であることと、通学区域が木更津第二小学校と請西小学校の一部、真舟小学校ですが、



平成31年4月の新生より請西東6丁目から8丁目、請西南2丁目から4丁目木更津第二中学区から太田中学区に変更となることです。

また、学校のすぐ下を国道16号線が通っており、おびただしい交通量です。

15ページをご覧ください。木更津第三中学校です。生徒数は242名、通常学級が9学級、特別支援学級が3学級です。平成36年度には生徒数が276名、通常学級が9学級、特別支援学級が3学級と、今後はやや増加傾向と予想されます。

通学区域は西清小学校の一部学区と祇園小学校の一部学区ですが、通学区域見直しにより、平成31年4月入学の生徒から祇園小学校全てが木更津第三中学校区となります。また、学区全域が片道2.5km以内ですが、通学区域見直しにより、学区全域が3km以内となります。

続いて岩根中学校です。生徒数は198名、通常学級が6学級、特別支援学級が2学級です。平成36年度には生徒数が198名、通常学級6学級、特別支援学級2学級と、今後はほぼ横ばいと予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道3.5km以内であることと、通学区域は高柳小学区であること、学区には国道16号線バイパス道路と旧道が並行して走り、交通量が多い場所があることです。

16ページをご覧ください。鎌足中学校です。生徒数は46名、通常学級が3学級、特別支援学級が1学級です。平成36年度には生徒数48名、通常学級3学級、特別支援学級2学級と、今後はほぼ横ばいと予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道4.5km以内であることと、通学区域は鎌足小学校区であること、学区の大半が市街化調整区域であるため、将来的にも生徒数の大幅増は見込めない状況であることです。

続いて金田中学校です。生徒数は72人、通常学級が3学級、特別支援学級が1学級です。平成36年度は生徒数が108名、通常学級が4学級、特別支援学級が2学級と、今後は大幅な増加が予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道3.5km以内であることと、通学区域が金田小学校区であること、大型商業施設の進出や土地区画整理事業が施行されたことにより、この表に書いてある以上に生徒数の増加が予想されていることです。

17ページをご覧ください。中郷中学校です。生徒数は12名、通常学級が2学級、特別支援学級が1学級です。

主な特徴としては、学区全域が片道5km以内であることと、通学

区域が中郷小学校であること、平成30年度末をもって、清川中学校と統合し、中郷中学区の生徒は清川中学校に通学することになることです。また小規模特認校です。

続いて富来田中学校です。生徒数は120名、通常学級が5学級、特別支援学級が2学級です。平成36年度には生徒数が89名、通常学級が3学級、特別支援学級が2学級と、今後は大幅な減少が予想されます。

主な特徴としては、通学区域が一部片道6kmを超える地域があることと、通学区域は馬來田小学校と富岡小学校であること、市内で最も学区が広く、市原市、袖ヶ浦市、君津市に隣接していること、平成31年度に富来田小学校と合わせ、小中一貫校となる予定であることです。

18ページをご覧ください。太田中学校です。生徒数は534名、通常学級が16学級、特別支援学級が3学級です。平成36年度には生徒数が711名、通常学級が20学級、特別支援学級は3学級と、今後は大幅な増加が予想されます。

主な特徴としては、現在の通学区域は清見台小学校と請西小学校の一部学区ですが、平成31年度の新入生より、真舟小学校区の請西東6～8丁目、請西南2～4丁目が木更津第二中学校区より太田中学校区となることです。そのため、現在は学区全域が片道3km以内ですが、平成31年度より片道3.5km以内となります。

また請西南地区の人口の増加に伴い、更に生徒数が増えることが予想されています。それから32年度以降に教室が足りなくなることが予想されますので、校舎増築で対応していきたいと考えております。

続いて畑沢中学校です。生徒数は432名、通常学級が13学級、特別支援学級が2学級です。平成36年度には生徒数が349名、通常学級が10学級、特別支援学級が1学級と、今後は減少傾向と予想されます。

主な特徴としては学区全域が片道2.5km以内であることと、通学区域は畑沢小学校区と波岡小学校の一部学区であることです。

19ページをご覧ください。岩根西中学校です。生徒数は195名、通常学級が6学級、特別支援学級が2学級です。平成36年度には生徒数が154名、通常学級が6学級、特別支援学級が2学級と、今後は減少傾向と予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道3km以内であることと、通学区域は岩根小学区であることです。

続いて波岡中学校です。生徒数は396名、通常学級が11学級、特別支援学級が2学級です。平成36年度には生徒数が501名、通常学級数が15学級、特別支援学級が1学級と、今後は大幅な増加が

予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道4km以内であることと、通学区域は波岡小学校の一部学区と八幡台小学区であることです。

20ページをご覧ください。清川中学校です。生徒数は381名、通常学級が12学級、特別支援学級が2学級です。平成36年度には生徒数が317名、通常学級が9学級と、特別支援学級が3学級で、今後は減少傾向と予想されます。

主な特徴としては、学区全域が片道6km以内であることと、通学区域は祇園小学校の一部学区、東清小学校区、南清小学校区ですが、通学区域見直しにより、平成31年度の新入生より祇園小学校区は全て木更津第三中学校区となることです。また学校統合に関わり、平成31年度から中郷小学校区の児童は清川中学校に進学することになります。

以上で、木更津市の学校の現状について私からの説明を終わらせていただきます。

(質疑応答)

橋口会長 ただいまの説明を受けまして、質問等がありますか。

北村委員 資料4の建設年度の項目で、1つの学校の中に建設年度が複数記載されている学校は、増築という解釈でよろしいでしょうか。

重森副主幹 そのような形になります。

北村委員 資料4を見ると、建設年度が昭和40年代に建設された学校が多く、耐震工事はしているとは思いますが、老朽化による耐久年数等が同じ時期になるとは思いますが、どう考えているでしょうか。

重森副主幹 耐震工事を行った部分につきましては、一緒に大規模工事も行っています。今後は長寿命化計画を立てないといけないということもありますので、計画を策定し、計画的に工事をしていきたいと考えております。

加藤委員 真舟小学校につきましてお聞きします。開校してから5年しか経過していないのに、教室が足りずに増築工事をしているという話がありました。真舟小学校を新設する段階で考えていた児童数の見込みより、現在の真舟小の児童数が大幅に増加しているのはなぜでしょうか。

また、請西千束台土地区画整理区域にどれくらいの児童生徒が張り付く予定となっているのでしょうか。

古宇田主事 請西千束台土地区画整理区域の見込みについて説明します。あくまで見込みですが、平成31年度につきましては児童が34名、生徒が9名、平成32年度につきましては児童が72名、生徒が18名、推計上一番児童生徒数が多くなるのが平成36年度で、児童が148名、生徒が62名となっております。

内海主幹 真舟小学校の児童数が見込みより増加したことにつきましては、当

初聞いていた人数より全体的に大幅に増加したと聞いております。

岩埜部長 建設当初は各学年4学級の全体で普通教室24教室と特別支援教室3教室が補助金の対象になり、補助金の対象となる基準で建設している。その後、貼り付けが多くなり、特別教室を5教室転用しており、加えて更に3学級増になる予定となっているので、8教室分を補助金対象としながら増築をして、一番児童数が多くなる時期に対応しようと考えています。

北村委員 真舟小学校については、各教室にエアコンが設置されており、君津市や袖ヶ浦市でも設置の動きがありますが、木更津市でのエアコン設置について進捗状況はどうなっているのでしょうか。

岩埜部長 本市でも設置する方向でおります。現在は、どのように設置を行うか詳細について検討しており、なるべく早い時期に設置できるように進めています。

内田委員 金田中学校区と波岡中学校区についてお聞きします。金田小学校の児童数が約200人増加するのに、金田中学校の児童が約40名しか増加していないこと、また八幡台小学校の児童数が大幅に減少、波岡小学校の児童数がほぼ横ばいなのに、波岡中学校の生徒数が大幅な増加しているのはなぜでしょうか。

高澤教育長 平成30年度の小学1年生が、平成36年度に中学1年生になるので、小学校の増減と中学校の増減が同じ年度ではなく、数年後に中学校の増減として影響が出ます。例えば、金田小学校の場合、平成30年度の小学1年生が2学級あり、その学年が中学生になる平成36年度に、金田中学校の学級数は増加しています。そのような形で小学校の増減の影響が、中学校の増減に反映されるのが数年遅れてからになるので、こういった現象が起きています。波岡中学校区も同じ見方になり、八幡台小学校と波岡小学校の増減が数年遅れて波岡中学校に反映されてきます。

《 休 憩 》

## (2)本市における適正規模

(説明概要)

橋口会長 それでは、(2)「本市における適正規模」に議題に供します。事務局より、説明を求めます。

内海主幹 今回行っている審議会では、木更津市内の各小中学校それぞれの今後の在り方について検討する、全市的な見直しを図ってまいりたいと思っております。その全市的な見直しを行うにあたり、木更津市として適正規模をどのように捉えるのが重要です。

資料15の1ページの1をご覧ください。平成23年10月に策定し、平成28年11月に変更した「木更津市立小中学校の適正規模及

び適正配置に関する基本方針」では、適正規模を「小学校は12学級から18学級」、中学校は「9学級から18学級」としました。

その理由としましては、「小中学校ともに全ての学年において、学習内容に適した集団編成（少人数教育）やクラス替えが可能となり、より効果的な学校行事等諸活動が行える下限の規模として小学校12学級、中学校9学級とします。9学級以上の学級を有する中学校については、千葉県教職員配置基準に基づき全教科免許状所有教員及び5教科（国・数・理・社・英）の複数教員の配置が可能です。」となっております。

それに基づいて作成したのが資料16の「平成30年度木更津市の学校規模」です。基本方針に基づき、小学校19校を分類したところ、今年度は標準を下回る小学校は富岡小学校をはじめ、8校ございます。このうち、富岡小学校と馬来田小学校は平成30年度末を持って統合し、富来田小学校となります。逆に標準を上回る小学校は畑沢小学校をはじめ、3校あります。

続いて中学校です。中学校13校を分類したところ、今年度は標準を下回る中学校は中郷中学校をはじめ、6校でございます。このうち、中郷中学校は平成30年度末をもって清川中学校と統合します。

現時点での木更津市における適正規模の考え方及び学校規模は以上でございます。今回は、この適正規模の考え方につきまして、協議をしていただきたいと考えております。

では、続きまして、法律における適正規模の考え方を説明いたします。資料15の2をご覧ください。「学校教育法施行規則第41条」及び「79条」及び、「義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令」において、適正規模は「12学級から18学級まで」とされております。

2 ページ目の中ほど、3をご覧ください。文部科学省に見る適正規模の考え方ですが、平成27年1月27日に「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～」が策定されました。

それによりますと、「望ましい学級数の考え方」として、「小学校では、まず複式学級を解消するためには少なくとも1学年1学級以上（6学級以上）であることが必要となります。また、全学年でクラス替えを可能としたり、学習活動の特質に応じて学級を超えた集団を編成したり、同学年に複数教員を配置するためには1学年2学級以上（12学級以上）あることが望ましいものと考えられます。」とあります。

続いて中学校ですが、「中学校についても、全学年でクラス替えを可能としたり、学級を超えた集団編成を可能としたり、同学年に複数教員を配置するためには、少なくとも1学年2学級以上（6学級以上）

が必要となります。また、免許外指導をなくしたり、全ての授業で教科担任による学習指導を行ったりするためには、少なくとも9学級以上を確保することが望ましいものと考えられます。」とあります。

つまり文部科学省の考えは、必要な学級数としては小中学校とも6学級以上、望ましい学級数としては小学校12学級以上、中学校9学級以上と読み取れるのではないかと考えます。

3ページの(2)をご覧ください。「学校規模の標準を下回る場合の対応の目安」ですが、簡単に説明しますと、小中学校とも、複式学級が存在する規模については、「一般に教育上の課題が極めて大きいため、学校統合等により適正規模に近づけることの可否を速やかに検討する必要がある。」とされております。以下、学級数に応じた対応の目安が書かれておりますので、ご覧ください。

次に(3)に移ります。5ページをご覧ください。複式学級の課題です。まず「教員に特別な指導技術が求められる」ことです。通常学級においては、1つの学年の児童生徒集団を教えますが、複式学級においては、複数の学年の指導を同時に行いますので、教員には特別な指導技術が求められます。

また、「複数学年分や複数教科分の教材研究・指導準備を行うこととなるため、教員の負担が大きい。」ことです。つまり教員にとっては、教材研究等の時間が2倍かかることとなります。

それ以外にも「実験・観察など長時間の直接指導が必要となる活動に制約が生じる」ことです。理科等で複数の実験をするときには安全面等で大きな懸念が生じます。

以上のようなことは、このあと説明させていただきます小規模化のデメリットと関係してきます。

次に(4)に移ります。学校の適正配置についてです。文部科学省の「通学距離による考え方」ですが、「徒歩や自転車による通学距離としては、小学校で4km以内、中学校で6km以内という基準はおおよその目安として妥当であると考えられる。」とされております。

また「通学時間による考え方」として、「適切な交通手段が確保でき、かつ遠距離通学や長時間通学によるデメリットを一定程度解消できる見通しが立つということを前提として、通学時間において、『おおむね1時間以内』を一応の目安とした上で、各市町村において、地域の実情や児童生徒の実態に応じて1時間以上や1時間以内に設定することの適否も含めた判断を行うことが適当であると考えられる。」とされております。

続いて「学校規模によるメリット・デメリット」です。6ページをご覧ください。こちらの資料は、学校の適正配置に関して都道府県・市町村が作成している計画等を参考に文部科学省において作成したものです。

左側に小規模化、右側に大規模化のメリット、デメリットを学習面、生活面、学校運営面、財政面、その他に分けて、まとめてありますので、ご覧ください。

先ほど説明した文部科学省が作成した「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き」において、「望ましい学級数」と「必要な学級数」という2つの考え方を明記しております。

教育効果をあげたり、適切な学びを得たりするためには、「望ましい学級数」という考えが当然あり、それが適正規模であると考えます。

しかしながら、学校は地域のコミュニティの核になっていることや、統合に伴う児童生徒や保護者の通学に対する負担等を考えますと、望ましい学校規模、つまり適正規模に満たない学校については、無条件で、全て近隣の学校と統合ということにしてしまうのは非常に乱暴な考え方だとも考えます。

そこで基準としては適正規模として「望ましい学級数」を示しますが、「最低限必要な学級数の目安」も示していければよいと考えております。

特に「最低限、必要な学級数」に満たない学校については、とりわけ教育上の課題が大きく、すみやかな対応が必要であると考えております。

私からの説明は以上でございます。

(質疑応答)

橋口会長 今、適正規模につきまして説明がありました。ただいまの説明につきまして、質問等ございますか。

鎌田委員 適正規模の部分では、学級数によって基準を考えるというのがあります。適正配置の方では通学距離による考え方や通学時間の考え方というのがあります。どちらも妥当な考え方ではありますが、人口密度とかを考えると相反するものだと思います。それら相反するものをどのように整理すれば良いのか、国の指導や木更津市としての考え方があるのでしょうか。

内海主幹 国の指導ではありませんが、全国的に統廃合が進んでいる現状があり、平成27年に文部科学省で基本的な方向性や考慮すべき要素、留意点等をまとめた「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き」が策定されました。

木更津市としては、本審議会の中で審議しながら基準等を決めたてきたいと考えております。

橋口会長 適正規模の基準について、全国的にはどのような基準を設けている自治体が多いのでしょうか。

また、統合された学校の学級数については、どのような状況になっているか教えてください。

内海主幹 文部科学省が「学校規模の適正化及び少子化に対応した学校教育の充実に関する実態調査」を平成28年5月に行いました。それによりますと、適正規模の基準を定めている市町村で一番多かったのが、小学校は木更津市と同じ12学級から18学級、中学校も12学級から18学級としている市町村が一番多く、次が木更津市と同じ9学級から18学級でした。

あわせて学校が統合された際の学級数ですが、小学校では0学級から5学級が全体の48%、中学校では6学級以下が62%となっております。

橋口会長 木更津市の考える学級数は、全国的に一般的であるということですね。もう少し伺いますが、近隣市の富津市や君津市でも統廃合が進んでいます。各市の状況はいかがでしょうか。

内海主幹 では、近隣市の適正規模等につきまして報告をさせていただきます。

まず、富津市ですが、望ましい学級数は小学校が1学年2学級以上、12学級以上とし、中学校は1学年3学級以上、9学級以上としています。そして、必要と考える学級数は小学校が1学年1学級以上、6学級以上とし、中学校は1学年2学級以上、6学級以上としています。小学校では複式学級の解消、中学校では学年1学級の解消を目安としていました。

続いて君津市ですが、適正規模は小学校が12から18学級、中学校は6から18学級ということになっております。

なお統合につきましては、「全ての学校が適正規模の基準を満たすことを目指していますが、複式学級・単学級の学校が多く、その解消が急がれる中山間地域を第1次プログラムの対象」としており、その目的を小学校は複式学級の解消、つまり1学年1学級以上、中学校は最低限クラス替え可能な規模、つまり1学年2学級以上としています。

ただし、小学校は適正規模を満たさないものの、旧町村に小学校を1校残すということでした。

橋口会長 只今、事務局より全国的な状況等についてお聞きしましたが、このような状況も踏まえて、木更津市の適正規模の基準として「望ましい学級数」という基準を設け、それとともに「必要な学級数の目安」という考え方も設けることにつきまして、ご意見をお聞かせください。

北村委員 必要な学級数は理解できたが、木更津市の1学級の人数はどうなっているのでしょうか。

河野参事 小学校1年生から3年生は35名、小学校4年生から6年生が38名、中学校1年生が35名、中学校2,3年生が38名となっております。

橋口会長 国の基準はどうなっているのでしょうか。

高澤教育長 小学校1年生が35名、それ以外は40名です。



橋口会長 小学校が12から18学級、中学校が9から18学級というのを木更津市での譲れない基準として持つ必要があるのかなと感じたのですが、よろしいですか。

《異議なし》

橋口会長 そうすると、望ましい学級数に当てはまらない学校が出てくることと予想されます。望ましい学級数を下回る学校について、先ほど事務局より必要な学級数の目安ということで、もう一つ基準を設けるという考えが出ました。

高澤教育長 先ほど資料15の説明がありましたが、文部科学省は昭和33年に策定した基準の中で、小学校も中学校も適正規模は12から18学級とずっと述べてきました。しかし、少子化が進み、12から18学級に満たない学校については、適正規模にするために全て統合してよいのかという論議があったそうです。そういった動きの中で、資料15の2ページにありますように、望ましい学級数と最低限必要な学級数という下限を抑えたほうがよいだろうというように、文部科学省の考え方も変わってきています。小学校については、必要となる学級数が1学年1学級以上の6学級以上、理想とするのは1学年2学級以上の12学級以上、中学校については、必要となる学級数が1学年2学級以上の6学級以上、理想とするのは1学年3学級以上の9学級以上がよいという考え方になります。

最低限必要な学級数の下限については、小学校は複式学級を解消することが最低限必要な学級数と述べていて、中学校については単学級だと複式学級に落ちる可能性があるということでもよろしくないだろうと述べています。

また、中学校の場合は2つ意味があり、教科担任制になるので単学級だと職員数が足りなくなること、部活動等も人数が集まらないと活動ができないということが言われています。

そういったことも踏まえて、必要な学級数ということで下限の学級数を文部科学省も打ち出してきたのではないかと思います。

ただ、一挙に統合に向けてよいのかという部分で、弾力的な考えが5ページに載っています。例えば、通学距離として小学校で4km以内、中学校で6km以内という目安があり、通学時間がおおむね1時間以内とありますが、徒歩だと3時間かかる場合でも、スクールバスを利用すれば1時間以内に通学できればよいなどの考えがあります。

また、小学校についても複式学級になると子どもへの影響が大きくなるが、単学級なら地域のコミュニティの場でもあるので、そういったことも市町村で考慮してくださいということも述べています。

なので、基準を下回った学校については、全て統合に向かうのではなく、様々な条件を加味していき、考えていただければと思います。

関口委員 木更津市が富来田小学校と富来田中学校を小中一貫校の一つのモデルとして考えているので、その成果を鎌足小中学校のような市街化調整区域にある学校で実践し、小中一貫校により小規模校のデメリットを補っていくということも視野に入れて考えていけば良いのではないのでしょうか。

橋口会長 統合について、マイナスイメージがあり、反対する人も多くいますが、これからの教育というものは、小中一貫校や公民館等の施設複合など様々な方法を探していった方が良いと思います。

高澤教育長 文部科学省では、小規模校同士での統合のような小中一貫校は望ましくないという考えがあります。特に、中学校が中学校としての活動ができなくなる規模になってしまうと、小中一貫校として成り立たなくなってしまう。なので、中学校については中学校としての活動ができるほうがよいと考えています。施設の複合については、公共施設再配置計画の中で考えていますので、学校と社会教育施設の複合はこれから進んでいくと思います。ただ、現状の施設の中での複合は難しい面もあるので、5年、10年後には複合した施設が出てくると思います。

鎌田委員 適正規模について確認ですが、望ましい学級数として小学校が12から18学級、中学校が9から18学級、必要な学級数は何学級になりますか。

橋口会長 今までの説明等をまとめますと、必要な学級数は小学校6学級以上、中学校6学級以上になります。

内海主幹 中学校につきましては、「集団の中で、多様な考え方に触れる機会や学びあいの機会、切磋琢磨する機会が少なくなりやすい」ことや「部活動等の設置が限定され、選択の幅が狭まりやすい」こと、「人間関係や相互の評価等が固定化しやすい」等を考えますと、クラス替えが出来る「6学級以上で1学年2学級以上」というように考えております。

橋口会長 それでは、木更津市における適正規模である「望ましい学級数」は小学校につきまして「12学級から18学級で、1学年2学級から3学級」、中学校につきましては「9学級から18学級で、1学年3学級から6学級」で、「必要な学級数の目安」は、小学校が「6学級以上で1学年1学級以上」、中学校については「6学級以上で1学年2学級以上」を基準としていきたいと思います。今回は、この点も考慮し、学校ごとの課題を整理してまいりたいと思いますので、よろしく願います。

それでは以上を持ちまして、本日の議事を終了させていただきます。

## 5. その他

橋口会長 続きまして、「5. その他」となりますが、事務局から何かあります

か。

大胡主事 第3回の審議会につきましては、12月10日の月曜日を予定しております。後日、改めましてご案内の文書を届けさせていただきます。

なお第1回の審議会の際には、9月から11月に第2回及び第3回適正規模等審議会を開き、現地調査を行わせていただくという予定を立てておりましたが、現地調査につきましては、ある程度、課題がはっきりしたところで行わせていただいた方が効果的であると考え、延期させていただきます。予定が変更となり、申し訳ございませんでした。

橋口会長 それでは、皆様、長時間にわたり慎重なるご審議ありがとうございました。

以上をもちまして、第2回木更津市立小中学校適正規模等審議会を閉会いたします。ご苦労様でした。

以上

上記会議録を証するため下記署名する。

平成30年11月14日

木更津市立小中学校適正規模等審議会委員 (内田慎一郎委員署名)